

必ず出てくる

花川 洋子

いろんなものがよく私の前から姿を消す。私に見つかからないように、本当に上手に隠れる。眼鏡や、前売りで買った切符や、役所に提出しなければいけない書類。でも私はあわてて探し回ったりしない。必ず出てくる、と確信しているから。

が、先日はこんなことがあった。

図書館で借りた本、製本も緩んでしまっていて、倉庫から出してもらったものである。B 6、65ページの『ばば様のむかしばなし』。この芳井地域の昔話、言い伝えなど、25話が98歳のばばさまによって語られた記録である。「昭和17年発行」「非売品」というのが重い。

「貸し出しはできないんです」と司書の人は言う。

「ではコピーさせていただけませんか」

「それも主任に聞いておきます。明日にでもきてください」

というやり取りがあつて、やっと貸してもらえた本である。

その翌日、岡山市内に用事があつたので、隙間の時間に、コンビニに入つてコピー機を使わせてもらった。最新式の機械でサラサラと真っ白い紙にくつきりと印刷されて出てきた。

翌日、さあ、図書館に本を返却に行こう、としたら、あれ、あの本がない。そんなはずはない。

昨日の行動をたどってみる。コピーしてファイルに入れた。よくコピーの原稿をコピー機に置きっぱなしにしてしまうことがある。

そういう忘れものをしてはいけない、と自分に言い聞かせた、つも

りだ。昨日のコンビニの店をネットで検索して電話する。もう少し北の店だと教えられた。そのコンビニに電話する。防犯ビデオを再生して、「原稿もきちんとファイルに入れておられますよ」。

とにかく昨日の私の歩いた経路をたどるしかない。井原線の切符を買い、先ほど親切に対応してくれた店を訪ねて、お礼をいう。

多分ここではない、と思いながらも次に行った銀行に行く。食堂、県立図書館。駅の忘れ物係。他にもう探すところもない。まる一日、交通費2000円を費やして、「できるだけのことではした、あとは芳井の図書館に、正直に謝って今の私にできることを聞くしかない」と自分を納得させた。

寝る前に机の上を片付けた時、「あっ」本屋さんの紙袋に私が一日中探し回った「ばば様のむかしばなし」が丁寧に収められているではないか。昨夜、私がここに置いたのだった。とじがバラバラにならないように、と袋に入れて。

「必ず出てくる」。翌日軽やかな気持ちで返却に行った。

作者 花川洋子

題名 必ず出てくる

山陽新聞夕刊

2019.11.21 掲載